



Title	ロマンスから小説へ- 『ボイン河の戦い』
Author(s)	田代, 幸造
Citation	明治大学教養論集, 187: 1-24
URL	http://hdl.handle.net/10291/8859
Rights	
Issue Date	1986-03-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

ロマンスから小説へ

—『ボイン河の戦い』

田代幸造

(1)

『ボイン河の戦い』(*The Boyne Water*)は、1826年にオハラ兄弟 (the O'Hara Family) の名で出版された。それは1825年の7月に書き始められて、その年のクリスマスには既にその原稿が印刷屋の手に渡されたのだった。この膨大な作品がわずか年半足らずのうちに書き上げられたということは驚嘆に値すると言わざるを得ない。

著者オハラ兄弟とはマイケル・バニム (Michael Banim, 1796—1874) とジョン・バニム (John Banim, 1798—1842) のことである。彼らはアイルランド南部の都市キルケニー (Kilkenny) の富裕な商人の子として生まれ、父は子どもたちには立派な教育を受けさせたいと希望していたが、事業の失敗により、マイケルは学業半ばで父の手伝いをせざるを得なくなった。一方ジョンもダブリン (Dublin) のロイヤル・アカデミー (Royal Academy) で絵の修業をしていたが、故郷のキルケニーに戻って近所の子どもたちに絵を教えて生計を立てざるを得なくなった。しかし生来芸術的傾向の強いジョンは、兄のマイケルに共同で物語を書くことを提案し、彼らはオハラ兄弟という名で作品を発表するに至った。『ボイン河の戦い』はこのようにして生まれた作品である。

しかしこの作品はジョンがロンドン滞在中に執筆されたものであり、マイケ

ルはこの作品について次のようにいっている。

リムリック (Limerick) の包囲戦 (いわゆる条約破棄の包囲戦と言われている) の現場を調査し、その包囲された都市から、キルケニーからの途上にあつた援軍の砲兵隊を奇襲して壊滅させた地点までのサースフィールド (Sarsfield) の道筋をたどつた以外には、わたしはこの物語に直接関与はしなかつた。この作品はその進行中にわたしの手を通してに過ぎなかつた。わたしは余分なものを削除したり、不足なものを補つたりして随意に訂正した⁽¹⁾だけだつた。

つまりこの作品は合作とは名のみで、実はほとんどジョンの独作であると言っても過言ではない。その上マイケルが「削除したり、補つたり、訂正したり」した点は、イギリスの読者の感情をおもんばかつて、彼らの感情を刺戟するような点に限られていた。それはイギリスで名を成そうとして、この作品の執筆当時、ジョンが病身の妻と、自分の脊髄の病気に悩まされながら、ロンドンで苦闘していることを思い、兄として、マイケルは弟の成功を心から願つていたからであろうと思われる。いずれにせよ、この作品におけるマイケルの参加は微々たるものであり、この作品はジョンの意見のみで出来あがつたものとみるのが妥当である。

(2)

1690年6月30日、ジェイムズ二世 (James II) とウィリアム三世 (William III) はアイルランドの東北に位置するドロヘダ (Drogheda) 近くのポイン河で相対峙した。戦闘は翌7月1日早朝に始まり、日没までにはジェイムズ二世は南に向つて逃亡し、彼の軍は全面退却して勝敗は決定的となつた。この戦闘の前日、つまり6月30日の偶発事件を J. G. シムズは次のように伝えている。

二人の王はポイン河で遭遇し、ジェイムズは、彼のアイルランド人とフラ

ンス人の部隊を南岸に整列させた。ウィリアムの方が多数の兵員——ジェームズの二万五千人に対し約三万六千人——を擁し、イギリス人のほかにオランダ人、デンマーク人、ドイツ人そしてユグノーを勧誘し、軍勢に加えていた。彼自身は、偉大な将軍というよりは勇敢で向こう見ずの戦士であった。戦闘の前日、偵察中にアイルランド人の矢を受けて傷つき、彼の死去の報はパリに達し、そこでは祝福の鐘が鳴らされ、かがり火がたかれたのである。しかし彼の傷は骨まで達せず、「不幸中の幸いだ」と言いつつ任務を続行し⁽²⁾た。(下線部筆者)

引用文中の下線部を、小説家ジョン・バニムは次のように描写している。

パークなるジェームズ軍きっての射手が砲の狙いをつけて手に持った火のついた火縄を持ち上げた。

「陛下、一分の隙もなくウィリアムに狙いをつけました。あの三つの王冠をもったやつを打ちましょう。」

「待て！」と、ジェームズは叫んだ。あらかじめ計画したことだったとはいえ、まだ決心がつかかねていたのだった。彼は「悪党めが、朕の女婿を撃ってはならん」と、その砲をたたいた。

パークはまるでその命令が遅すぎたかのように出鱈目に、一番離れている砲を、そしてほとんど同時にジェームズがその砲先を叩いて砲身を下げたやつを発砲した。最初の砲からの弾丸がウィリアムの副官の一人を殺し、さらにションバーク伯 (Count Schomberg) とエヴリンの乗馬を殺したが、二番目の砲の弾丸はパークの狙いから外れて河を超え、ウィリアムが立っていた低い方の堤の縁に当って跳ね返り、彼の肩をかすめただけだった。しかしウィリアムはそのショックで倒れ、将校たちが彼のまわりに集って来た。河の向こう側に居る敵軍はウィリアムが死んだと思って喚声をあげ、ダノア丘 (Dunore-Hill) まで馬を走らせて本隊に合流し、今の出来事を自分たちが考えた通りに知らせた。すると前の十倍ものどよめきが丘や谷間に鳴り響き、

ドロヘダの方角に広がり、遙か遠方に消えていった。

一方ジェームズはまだためらってはいたものの、はじめは自分で計画しておきながら結局はみずから妨害してしまったその計画の結果を想像して得意になり、即刻ダブリンとパリにウィリアムの死を報告する伝令を派遣したのだった。その知らせを受けてこの二つの都市では松明が焚かれ、様々な祝典が催されたのだった。……(中略)……

ウィリアムは立ち上りながら、よそよそしく次のように言っただけだった。

「君、何ともないよ。もっと正確に狙わなくちやいかんね。鉄砲玉に当たるも当たらんも、みな運命さ。⁽³⁾」

以上二つの引用文を読み比べてみると、矢と砲弾の違いこそあれ、ジョン・バニムがいかに忠実に忠実だったかがわかる。(もち論 J. G. シムズの記述が正確であることを前提としてだが。) しかもここには、血のかよった一個の人間としてのジェームズが見事に描かれている。それは決断力に欠け、遲疑悛巡する弱い人間としてのジェームズを彷彿させるものである。

歴史小説は当該時代の事件の叙述の中に、人間が、つまり血のかよった肉体を具えた人間が躍動していなければならないことは言うまでもないことであり、この意味でジョン・バニムの『ボイン河の戦い』は「アイルランドのいかなる他の歴史小説も未だ達しなかった規準を設定するものであり、若干の留保条件があるにもせよ、それはスコット (Walter Scott) 以来のその種の最善の作品である⁽⁴⁾」と言えるだろう。

(3)

『ボイン河の戦い』は全3巻、1232ページにわたる膨大な作品である。それが扱っている時代はジェームズⅡ世がフランスから呼び戻されてイギリスの王位についた1685年から、上記のボイン河の戦闘を経て、リムリック条約の締結に至る6年間であり、アイルランドに広大な土地を所有しているイギリス人地主のロバート・エヴリン (Robert Evelyn)——以下エヴリンとする——と「血

の最後の一滴までアイルランド人⁽⁵⁾」であるエドモンド・マクドネル (Edmund M'Donnell——以下エドモンドとする——)の友情と対立を主軸として物語が展開する。彼ら二人の対立は、ジョージ・ウォーカー (George Walker) とオハガティ (O'Haggerty) の対立であり、さらにイギリス人とアイルランド人という民族的な対立に示されるものであり、そしてまたプロテスタント対カトリックの対立を意味するものであって、結局はウィリアム三世とジェイムズ二世の政治的対立に集約されるものである。

ジェイムズ二世はフランス人を母とし、フランスにおいて養育された熱烈なカトリシズム信仰者だった。したがって1685年、彼がイギリス国王に迎えられや矢継ぎ早めに親カトリックの政策を打ち出したことも無理からぬものである。1687年には義弟でプロテスタントであったクラレンドン卿 (Lord Clarendon) のアイルランド総督としての地位を剥奪して、代わって長くジェイムズの側近にあって、カトリックの要求の強力な弁護人となっていたティアコンネル伯、リチャード・トールボット (Richard Talbot, Earl of Tyrconnell) を総督に就任させるに至った。さらにカトリックの判事とカトリックの枢密院顧問を任命して、行政の枢要な地位はますますカトリックが占めるようになった。その上トールボットはアイルランド軍の総師としての地位を利用して、軍隊内の多数のプロテスタントを罷免し、かわりにカトリックを正規兵として任命するという手段で軍隊の改組に着手したのだった。このような情勢になると、カトリックのプロテスタント聖職者への納税 (十分の一税) を厭う風潮が強くなってくるのも当然である。かくしてプロテスタント教会の収入はカトリックの司教への助成金という名目で流用される部分が多くなった。

情勢がプロテスタントにとって逼迫の度を加えるにつれて彼らの念頭に去来するのは、1641年のカトリックによるプロテスタントの大虐殺事件の恐怖だった。ジョン・バニムは作品の中でカトリックの勝ち誇った喜びと、プロテスタントのやり場のない憤懣とをレンスター公 (Duke of Leinster) の祖となったフィッツジェラルド (Fitzgerald) の次のような言葉に要約している。

「カトリックの下司どもの野次がうるさくて」と、フィッツジェラルド氏は言葉を続けた。「やつらの野良犬みたいな喚声を聞いてみるよ。略奪、殺人、皆殺しといったあの『41年』のような、奴らの毒氣と野蛮から守ってくれる、しかも喜んでだよ、守ってくれることが出来る人間は軍隊しかないというのに、その軍隊を武装解除して解散させてしまうようなことをしやがって勝ち誇っている、あの喚声をさ。」⁽⁶⁾

しかし『41年』の事件に対する報復は、1649年のクロムウェル (Cromwell) による暴虐を極めたカトリック——それは主としてアイルランド人で占められている——に対する大弾圧となってあらわれた。それはまさに、暴虐は報復を呼び、その報復はさらに次の暴虐を生むことを知らしめるものであり、ジョン・パニムの言う「ひとつの野蛮な行為に報復するがわは、確かにその報復の原因となったがわと、ほとんど善悪の差はない」⁽⁷⁾ことを思い知らせるものである。

かくして蓄積された双方の憎悪と恐怖心は、1688年のデリー (Derry, 現在の Londonderry) とエニスキレン (Enniskillen) におけるプロテスタントによるジェームズⅡ世への反抗となって顕在化し、翌1689年にはジェームズⅡ世がアイルランドに来島して、デリー包囲戦が展開されるに至った。そして「包囲戦の目的はデリーに飢餓の衝撃を与えることによって降伏させること」⁽⁸⁾であり、デリーは「この世の災いの中でも最も悲惨にして、かつ屈辱的な飢餓状態」⁽⁹⁾におちいり、「守備隊の軍馬を屠殺」⁽¹⁰⁾せざるを得ない惨状を呈するまでに追いつめられたのだった。しかしこの窮状を救うべく急遽市長兼守備隊長に選挙されたプロテスタントの牧師ジョージ・ウォーカーの指揮の下に、市民は3ヶ月に亘る辛苦に耐えて抗戦を続けてデリーを守り抜いたのだった。この籠城はその後長くプロテスタントの誇りとなり、語り草となって、民謡にうたわれて現在にまで伝えられる結果となった。

1690年6月、ウィリアムⅢ世がアイルランドに来島して二人の王はドロヘダのポイン河を挟んで対決することになった。これがすでに述べた「ポイン河の戦い」である。その結果はすでに記した通りであり、ジェームズ軍はシャノン

(Shannon) まで三三五五退却を続け、ジェイムズⅡ世自身はフランスに逃亡し、軍の総師ティアコンネル伯はジェイムズⅡ世軍の完敗を認めざるを得なかった。しかしパトリック・サースフィールド将軍はリムリックに拠って最後の抵抗を試みる。一方、ウィリアムⅢ世もギンクル (Ginkle, 但し史書では Ginkel) に後事を託して帰英する。ギンクルはリムリックまでの進撃の途中、アスロン (Athlone) とオーフリム (Aughrim) でジェイムズ軍の総指揮を託されたサン・リュート (St Ruth) の迎撃を難なく撃ち破ってリムリックに近づく。

サースフィールドは土着のアイルランド人の援助を得て、バリニーディ (Bal-lyneedy) まで進出してギンクルの率いるウィリアム軍に打撃を与えるが、再びリムリックに戻って籠城し、ウィリアム軍を迎撃する。リムリック市民は女性に至るまで武器をとって戦った。

サースフィールドの指揮のもと、勇敢なスコットランド人ウォーハップ (Warhup) の援助を得て、攻撃軍に対し、猛烈な突撃が敢行された時、女性の一団が、服は引き裂かれ、血にまみれ、髪を振り乱して、破壊されてできた城壁の裂け口によじ登り、偶然手に入れた武器を振り回しながら、敗走してゆく敵軍に対して勝利と軽侮の気狂いじみた喚声をあげたのだった。⁽¹¹⁾

それはデリー死守がプロテスタントの誇りとして伝えられているのと同様に、カトリック教徒の誇りとなって現在にまで語りつがれている行為であった。

しかしその後ジェイムズ軍の総指揮に当たったサン・リュートが戦死し、その後任となったサースフィールドはウィリアム軍の総指揮に当たっていたギンクルに不意をつかれて敗退の己むなきに至った。ギンクルはこの機を逃がさず、すでに帰国していたウィリアムⅢ世の「如何なる条件にてもアイルランド戦争を終結せしめよ」⁽¹²⁾ という敵命にしたがって、財産の保全、信仰の自由を認めるなどの、カトリックにとってはかなり有利な条件を出して講和を申し出る。サースフィールドは徹底抗戦を主張するが、ルイXIV世の援軍の到着が段々に望

み薄くなって来つつあった状況下であったために、アイルランド人将校たちは業を煮やして、強引に講和条約書に署名し、サースフィールドも己むなく同書に署名して、デリー包囲戦以来の一連の戦闘は終結した。サースフィールドは七千名の部下と共にフランスに去って行く。しかしリムリック条約はウィストミンスター議会の批准するところとならず、結局カトリックは依然として浮かばれず、アイルランドは勇将を失ったまま、かりそめの平和を享受するに至った。

『ボイン河の戦い』は以上に略述したような社会的動乱の中に翻弄される人間の宿命を描いた作品でもあると言える。

(4)

ジョン・バナムが『ボイン河の戦い』を世に出した1826年頃には、スコットランドではスコットが『ウェイヴァリー (Waverley)』で名を成し、確固とした歴史小説の方法を確立していた。彼は当時のアイルランドの作家たちにとっては目標とすべき、あるいは一種の憧れの的としての存在であった。彼らアイルランドの作家たちは、たとえばウィリアム・カールトン (William Carleton) の如く、彼に擬せられることを至上の光栄と考えていた程であった。したがってアイルランドの作家たちに与えたスコットの影響は計り知れないものがあると言っても過言ではない。

ではスコットが確立した歴史小説の方法とはどんなものであったか。それを一言にして言うならば、それは従来ロマンスとの決別である、と言えるだろう。彼はロマンスと小説との違いを次のように述べている。

ロマンスは散文または韻文による虚構の説話であり、その興味は不可思議、かつ異常な事件に拠るものであるが、小説はその事件が平凡な一連の人間界の事件と、現代の社会状況に於けるものであるが故に、ロマンスとは違う虚構の説話である。⁽¹⁴⁾

だからと言って彼はロマンス特有の冒険や、英雄のすぐれた行為、あるいは高貴な恋愛や勇敢な戦士たちの果敢な戦闘などを完全に捨て去ったわけではないことは、彼の作品を一読すれば明瞭である。ただそれらの扱い方がリアリスティックであり、登場人物は現実の歴史的な世界における生きた人間としての個性を具えている点において、ロマンスと相違していることがわかる。

ジョン・バナムも他のアイルランドの作家たちと同じようにスコットを手本にした一人であり、『ボイン河の戦い』においても当然その影響が濃厚にあらわれていることは言うまでもない。それはまず、人物の登場の仕方がいかにもロマンス的であり、そして物語が展開するにつれて彼らの扱い方が徐々にリアリスティックになることにあらわれている。そして虚構の人物と歴史上の實在人物との出会いという手法で、ロマンス的人物は現実味を帯び、ロマンス的想像の世界は歴史的現実の中に融け込み、この二つの世界は融合して作者の虚構が現実と分ち難い関係を樹立する点にある。

この作品は次のような文で始まる。

その仲間の中でも著しい対照を示している旅人の一行が、ベルファスト (Belfast) から、さらに北の方の、昔の要塞であるキャリックファーガス (Carickfergus) への道をたどっていたのは1685年の夏のことであった。⁽¹⁵⁾

作者は作品の冒頭で、時と場所とを明確に規定しているのである。これは明らかに作者の脳裏にロマンスではなく、リアリスティックな小説を作り出そうとする意図があったことを示すものである。

「仲間の中でも著しい対照を示している旅人の一行」というのは、ロバート・エヴリンとその妹エスタ (Estha)、及び彼らの叔父夫婦であるポール (Paul) とジャネット (Janet)、彼らの従者であるオリヴァ・ウィトル (Oliver Whittle) と驢馬車きの少年である。その中で「著しい対照を示している」のは「服装も見栄えがし、顔立ちも整っており、良家のお嬢さんと凛々しい騎士の家系とまではいかなくとも、その慣習と感情を物語る、名状し難くはあるが、

何かはっきりしたものを、その態度に示している」⁽¹⁶⁾ ロバート兄妹と、彼らから若干の距離を置いて同じような馬に乗ってはいるが「とても背が低く、丸々と太っている年配の男で、その脚は、普通はギリギリの長さしかないあぶみ革のために痛めつけられたわけでもないのに、跨っている馬の脇腹の半分ほどまでしかたっしていない」⁽¹⁷⁾ ポールと、「背は高く、その前に跨っている男(ウィトル)のおよそ3倍ほどの巨軀を包んでいるために、かえってその巨軀を誇張している」⁽¹⁸⁾ ジャネット夫婦との外面的な対照である。すなわち、それは高貴にして清純な人物と、中年過ぎの世俗にまみれた醜男と大女との対照である。彼ら4人の描写はいかにもリアリスティックに、その服装の細部に至るまで数ページにわたってなされてはいるが、描かれている人物は高貴な婦人と騎士。及び中年の俗物夫婦という典型的の域を出ていない。したがって彼らには生き生きとした個性は求めるべくもなく、ロマンスに登場する人物と規を一にするものである。

さらに近ずいて彼ら主従の会話を聞けば、対照関係は以上の4人対ウィトルという社会的身分の対照へと移動することをわれわれは知らされるのである。次の会話はジャネットとウィトルの会話の一部である。

“... never can the land have roads or ways, men or beasts, as it should have them, until popery and slavery be rooted out, with all jesuits, plotters, and suspected persons.”

“Never”, said *her attendant*, who rode before her, ... “never, till the auld forty-one comes round again ; whilk time, as an humble doer for the Lord, forbye a corporal muckle in favour wi’ that zealous man, tho’ an Erastian, Charles Coote, I returned to the papists and malignants, hilt-deep, the sword they had unsheathed among the Lord’s people.”⁽¹⁹⁾

(イタリックは筆者)

以上に引用したのはほんの一部分に過ぎないが、これを一読しただけでも主人（この場合はジャネット）の用いている言葉は標準的な英語であるのに対し

て、従僕（この場合はウィトル）のそれには俗語及び俗語的発音が多用されていることがわかる。つまり登場人物の用いる言葉によって社会的な身分の相違をあらわそうとしたものとみてよいであろう。

このような言葉の対照が最も効果的に用いられているのはイギリス人とアイルランド人との対照、と言うよりは対立を示そうとした時の言葉であろう。たとえば急用で西印度諸島に行かざるを得なくなったエヴリンを、ダブリンまで見送る途中、乗馬を盗まれたエドモンドに駿馬を売りつけようとした馬喰、実は盗賊 (rapparee) のウィスパラー (Whisperer) が、馬を惹きつける秘伝についてその一端を説明する部分の一部を見てみよう。

Nothin' asier in life, ... only it's jest a little bit iv a sacret, that I had from the father afore me, an' 'ill leave to this son that is to come afther me, ... av' no one else, plaise God; but I may as well tell you, genteel, some iv id; sure I give 'em a whisper, that they hears across the field, an' no body else can; ...⁽²⁰⁾

ウィスパラーは言うまでもなく「血の最後の一滴まで」アイルランド人であり、リムリックの戦闘においてはロリー・ナ・チョツペル (Rory-na-Choppell) という本名で、サースフィールドの腹臣として活躍し、特に魔女的な存在であるオナフ (Onagh) と共謀して、突入して来たウィリアム軍に大打撃を与え、ウィリアム軍の敗退のきっかけを作るなどの働きをした人物である。⁽²¹⁾ 彼が根っからのアイルランド人であることは同じアイルランド人にはあるが、イギリス人であるエヴリンと義兄弟の縁を結んで心情的にはイギリス人に近づいていたエドモンドとの言葉の対照によって明確に描き出されている。つまり言葉の対照は、イギリス的な人物とアイルランド的人物との対立を示すものとみてよいであろう。もち論作者はこの作品の至る所でアイルランド人には俗語を、時にはアイルランド語を英語を話せるアイルランド人の通訳を通してアイルランド語の直訳的な英語（たとえばエドモンドがオナフの予言をエヴリン一行のイギ

リス人に通訳をしてやる時の英語⁽²²⁾を使わせているのは、それが地方色を出し、現実感を読者に与えるためのリアリスティックな方法であるからである。これは明らかにスコットの歴史小説からの影響であり、同時代のウィリアム・カールトンが巧みにこの方法を用いてアイルランド農民の生活を活写した方法である。しかしこの方法は実はスコットの発明によるものではなく、その源を探ればエッジワース (Maria Edgeworth) の『ラックレント城』 (*Castle Rackrent*) に見出すことが出来るのである。

かくしてジョン・バナムはこの方法を用いてロマンス的雰囲気を伴っている登場人物に個性を与え、よりリアリスティックな人物へと変身させたと言うことが出来よう。

(5)

民族的対極性とでも言うべきこのようなイギリス人対アイルランド人の対立はどこから来たものであろうか。もち論12世紀におけるヘンリー二世のアイルランド征服以来、征服民族と被征服民族とのしこりはあるだろう。が、この溝をますます深めたのは他ならぬ宗教問題だった。イギリス人であり、プロテスタントであるエヴリン兄妹と、アイルランド人であり、熱烈なカトリックであるエドモンド兄妹が、それぞれの兄妹同志で婚約して一時的にしるエドモンドの領地で楽しい牧歌的生活をお互いに送っていた頃ですら、両方の妹たちの心に時折り去来し、悩ましたのは宗教問題であった。それは自分たちの子どもはプロテスタントとして育てられるべきか、それともカトリックとして育てられるべきかという問題であった。この点についてはお互いの変わらざる友情を誓い合った彼女たちも譲歩することをしないままになり、それは二組の兄妹のその後の別離を暗示する溝であった⁽²³⁾。このことはアイルランドにおける二民族を距てる壁として宗教問題がいかに根深く個人の心底にまで浸透しているかを示す好例である。そして更に、エヴリンとエヴァが一時的な絶交状態の後の再会を果たした時、彼らの仲を無情にも引き裂いた宗教について、彼らは次のような会話を交わす。

「そうですとも、エヴリン。たんに神を愛する形式が違うからといって、その子どもが残酷な扱いを受けるなんて、そんな風に神様が定めたもうたのでしょうか。お互いの心がどうしてこんな風に引き裂かれるのでしょうか。」

「何故って、」と彼は答えた。「この世のそもそもの始めから野望に駆られた王侯や聖職者たち、指導者や政治家たちは、わざわざ神の名を、独占のための合い言葉としてしまっているからですよ。」

「それで何時^{いつ}、」とエヴァは尋ねた。「何時^{いつ}、宗教は人々に平和と善意をもたらして呉れるのでしょうか。」

「どんな宗教の人たちも、自分の幸福に対して充分に目覚めて、宗教と政治を分離し、聖職者と政治家を区別して、聖職者の前ではそれなりに恭しく、心から頭を垂れるようにする、その時のことですよ。その時のことですよ。それまでは無理でしょうね。⁽²⁴⁾」

以上の会話、特にエヴリンの発言からわれわれは、宗教がいかに政治と深くかかわっているかがわかるのである。宗教が政治を左右し、政治が宗教を規定しているのが当時の社会的状況であった。したがってこのような宗教的対立は容易に政治的対立へと移行する。ジェイムズⅡ世対ウィリアムⅢ世の対立は、このような意味で象徴的である。つまりこのような対立は、個人的にはエヴリン対エドマンドの対立であり、社会的、民族的にはイギリス人対アイルランド人の対立となり、さらに政治的な面が強調されるとウィリアムⅢ世対ジェイムズⅡ世の対立となってあらわれるのであり、これらの対立の底流には宗教問題が厳として存在することが明瞭である。

ジョン・バナムは以上のような対立を『ボイン河の戦い』において主要なモチーフとして用いたのであり、このような二極対立のモチーフもスコットの影響であると言われている。

(6)

ここでエヴリンとエドマンドの対立の経過を追ってこの作品の構成を明らか

にしてみよう。

彼らの出会いは極めてロマンス的である。前述したエヴリン兄妹とその叔父夫婦らの一行がラーン (Larne) からグレナーム (Glenarm) に至る途中の険路でエスタが乗っていた馬が、断崖の険しさに対する恐怖のために暴れだし、彼女が危険にさらされた時に忽然と、しかもどこからともなく姿をあらわしてその危機を救ったのがエドモンド兄妹であった。それは何処からともなく忽然と時宜を得てあらわれ、美貌のヒロインを命がけで救出する、ロマンスの中でしばしば見られる万能の英雄を彷彿させるものであり、われわれ読者をリアリストティックな小説の世界よりはむしろロマンティックな物語の世界に誘うのに充分な雰囲気を与えるものである。その部分を引用してみよう。

このような状況が生じつつあったまさにその瞬間、そしてエスタの馬が相変わらず後じさっていたその時、エヴリン夫人 (ジャネット) がびっくり仰天したまさにその場所から別の二つの声が叫んだのだ。すると今まで見かけなかった二人の姿が、最初にその姿を彼女が見かけた男 (エドモンド兄妹の叔父にあたるコン・マクドネルのこと) がいたその同じ場所に飛び上がって来たが、それはまったく異なる種類の二人で、14才ぐらいの少女と18才ぐらいの少年だった。少年の方は (前にあらわれた男と——筆者注) 同じようにカービン銃を手にし、スコットランド風の縁なし帽子をかぶり、タータンチェックのズボンをはいており、少女の方は可愛らしい服装をしていた。二人ともたとえ粗野ではないにしろ、興味をかき立てるような態度だった。⁽²⁶⁾

もち論、この少年と少女がエドモンド兄妹であることは言うまでもあるまい。エドモンドの服装は彼ら一族がスコットランド出身であることを暗示している。それ故にこそエヴリン一行を自分の館に迎えた晩の宴会席上でエドモンドは次のように叫ばざるを得なかったのである。

「わたしたちはアイルランド人なのだ、このかわいそうなエヴァが言うよ

うに、わたしたちの血の最後の一滴に至るまで。なるほどわたしたちの先祖はスコットランドの出であろうとも、そんな記憶は失われてしまっている。ここが」と、彼は大地を踏みしめながら「ここがわたしたちの祖国であり、感情においてもわたしたちはアイルランド人なのだ。確信するが、わたしたちに対してなされた不当に残酷な行為はすべて許し、忘れることが出来るほどにアイルランド人⁽⁵⁾なのだ。」

この叫びが真実であることはその後の彼の行動によって立証される事になる。このような出会いによってマクドネル一族の館にしばらくの間滞在することになったエヴリン兄妹とエドモンド兄妹との間には急速に親愛の情が芽生えて、ほどなくそれぞれの兄妹どうしの婚約へと発展する。このような筋立てもまた、ロマンスそのものであると言うことが出来よう。だがここで彼らの愛情に影を落とし、一時的にしる彼らの仲が決裂したのは前述の宗教問題であった。それは彼ら二組の結婚式が挙行される寸前に顕在化する。その当日は彼ら四人の、否アイルランドにおけるプロテスタントとカトリックの運命を予言するかのよう
に風は吹きすさび、雨は小止みなく降り続ける日だった。彼らはそれぞれ自派の聖職者であるジョージ・ウォーカーとオハガーティによって挙式することを望んだので、二人の到着を待つ。しかし悪天候に災されてか決められた時刻までに二人とも到着しなかったために、彼らはもち論のこと、居並ぶ出席者たちもいらいらしながら彼ら二人の到着を待っている。そんな時にまず姿をあらわしたのがオハガーティであった。彼はその頃急激に顕著になってきたカトリックの反抗的態度を征圧するためにオランダからウィリアムがアイルランドに来島することになったが、この悪天候のためにアイルランドに近づくことが出来ないままオランダに引き返さざるを得なくなったことを会衆に告げて、会衆と共に快哉を叫ぶのだった。しかしその直後に到着したウォーカーはまったくその逆に、ウィリアムが無事に上陸したことを告げて、これまた居合わせた少数のプロテスタントと共に快哉を叫んだのだった。そのために式場は混乱に陥り、結局式を挙行することが不可能となって二組の婚約者たちはそれぞれの宗

派の者たちと行を共にすることになる。

かくしてエドモンド兄妹はアイルランド人として、そしてカトリックとして他のマクドネル一族と共にアントリム卿 (Lord Antrim) の指揮下に入って、ウィリアム軍を迎い撃つべくその準備に追われる身となる。一方エヴリンはウォーカーの説得にもかかわらず、「ジェイムズが国王である限り、彼に対する反抗は明らかに反逆である⁽²⁷⁾」と主張して譲らず、またエヴァに対する恋慕の情忘れ難く、ウィリアム軍に参加することを拒むのだった。しかしエヴァとの面会をアントリム卿に数回にわたって申し入れるが拒否されるに至り、さらに状況がプロテスタントにとって益々危険の度を加えるに及んで、彼は已むなくデリーへと旅立つ。その間にもアントリムの軍勢はデリーにむかって進軍を続ける。

エヴリンはデリーへの途上、父から譲り受けた所有地がどうなっているのかを心配して、ウォーカーの忠告を無視し、独りで視察に赴くが、そこで見たのは忠僕オリヴァー・ウィトルの絞首体と、折しも略奪の成果を誇って宴会の真最中であったギャロッピング・ホーガン (Galloping Horgan) を首領とする「盗賊」(rapparee) の一群だった。彼らは表面ではジェイムズⅡ世に対して忠誠を尽くす私設軍隊を装ってはいるが、その実は盗賊集団に過ぎなかった（しかしリムリックの戦闘ではサースフィールドの下で大いに活躍してウィリアム軍を悩ませた）。エヴリンはアイルランド人＝カトリック＝rapparee という単純な等式を勝手に作り上げて、アイルランド人に対する憎悪を深めるに至り、とうとうウィリアム軍に参加することを承諾する。

かくして彼は再びウォーカーと行を共にし、デリーへと向う。しかし、途中ウォーカー等と別行動をとったためにカトリックの集団に独りで追われる身となる。もち論この集団はギャロッピング・ホーガンの率いる集団とは違って、指揮者の命令が全集団に及び、規律正しい集団だった。それも当然のことで、それは由緒正しいアントリム卿の軍の一隊で、しかもその隊長がエドモンドであった。エドモンドは部下を待機させておいて密かにエヴリンに会い、彼を無事に逃がそうとするが、エヴリンのたつての願いをきき入れてエヴァとの再会

を許すのだった。そこでエヴリンはエヴァへの真情を打ちあけるが、彼女の出来ることはエヴリンの道案内をして無事に逃がしてやることだけだった。

この間にも彼らを取り巻く状勢は刻々と進展し、ハミルトン (Hamilton) の指揮するカトリックの一隊がデリーに接近してジェイムズⅡ世の率いる本隊を待ってデリー包囲作戦が開始される。

エドマンズの護衛の下にデリーに向かっていたエヴリンは途中はからずもウォーカーの一隊に遭遇し、不注意にも彼はエドマンズをウォーカーに紹介する。(しかしこのことはエヴリンが不注意だったというよりは、エヴリンの中立的な意識がいかに強かったかの証明となるものであり、ウィリアム軍の一員でありながら、エドマンズがその敵であることを忘れる程曖昧な敵・味方の意識しか持っていなかったことを示す好例である。) 当然のことながらウォーカーはエドマンズを捕虜としてエヴリンにその監視を命じたのだった。かくして彼らはジェイムズ軍の目を盗んで辛うじてデリー市に入ることが出来たが、そこは既に飢餓に苦しむ住民が溢れて死の影が漂う街と化していた。先にデリーに到着していたエスタは生来の病弱に加えて極度の食糧不足のため叔父ポールの看護を受ける身となってベッドに寝たっ切りの生活を送っていた。したがって捕虜の身でありながらエスタに会うことが出来たエドマンズはむしろ幸運だったと言える。というのは捕虜なるが故に戦闘に参加することなく、ポールに代わってエスタを看病することが出来たからである。

しかしエドマンズの必死の看病の甲斐もなくエスタは不帰の人となり、続いてポール夫婦も相次いで衰弱死するに至る。彼らの死の直前にオナフが必らず姿をあらわして死の予言をするが、このことはオナフのゴシック的な存在を読者に強く印象づけるものである。

かくして自滅寸前のデリーは応援に来島したションバーグ将軍によって救われるが、エドマンズは数ヶ月にわたるデリー包囲作戦の期間中、プロテスタント側の捕虜になっていたために既に彼の属する隊からは追放になっていたのだった。落胆して領地のストリップ・オヴ・バーン (Strip of Burne) に戻ってみると、そこはションバーグとカーク (Kirke) の率いる一隊によって略奪さ

れ、館は焼かれ、部下たちはほとんど殺戮されて廃虚と化していたのだった。彼のイギリス人、そしてプロテスタントに対する怒りと憎悪は決定的なものとなり、消し難く彼の心を蝕んで、彼は復讐を誓うのだった。彼はその決意を次のような悲痛な叫びであらわすのだった。

エヴリン奴が、裏切者奴が。イギリスの卑劣漢め、おれを解放してくれ。仲間よ。アイルランド人よ、友よ、おれを援けてくれ。やつは俺を捕虜にしようがって、俺をやつらに売ったのだ。おれを自由の身にしなければりゃ、打ちめ⁽²⁸⁾してしまえ。

かくして彼は盗賊の群にエヴァを伴って身を投じ、エヴリンとの友情は決定的に破られ、ここに彼らの完全な敵対関係が成立する。

とは言ってもエヴリンのエヴァに対する慕情は断ち難く、彼女を求めての旅はこのような状態になってもは続けられる。しかし身はションバーグの配下にあるために身勝手な行動は許されず、彼はいらだたしい日々を送るのみだった。そのうちウィリアム三世のところへ派遣される使節団の一行に加えられたために彼はロンドンに赴く。その前夜、旅の仕度をととのえているうち、いつ入れられたのかわからない、エヴァの置き手紙をカバンの中に発見する。それは彼に最後の別れを告げる手紙だった。彼は不安と絶望と焦燥のうちにロンドンに向けて出発する。今やウィリアム三世の廷臣としてケンジントン宮殿 (Kensington Palace) に居るウォーカーを通じてエヴリンはウィリアムに謁見の栄を賜ったが、ウィリアムは「ほっそりとしていて、ほとんど衰弱し切った姿⁽²⁹⁾」であり、「美人ではあるが大柄で男性的であり、不遜な⁽²⁹⁾」メアリー (Mary) とは好対照であった。しかも彼は「朕はイングランドの治め方よりは戦闘の仕方の方が得意である⁽³⁰⁾」と語るのだった。

それに対してエヴリンはサースフィールドの優待された捕虜としてジェイムズ二世からも謁見の栄を賜ったことがあるが、その時の「エヴリンは、大司教と面会した時のジル・ブラス (Gil Blas) を襲ったものよりも重大な運命に

対する恐怖と狼狽とが交り合って一言もしやべらないままだった」⁽³⁰⁾ほどにジェイムズは厳とした威厳を持った君主だった。

この二人の王の対照は、控え目ながら作者ジョン・バニムの親カトリック的態度の表明である。さらに虚構の人物であるエヴリンを実在の人物、それも国王という至上の人物と合わせることによって作者は物語に現実性を持たせようと意図したことは明らかである。このような方法もスコットの影響であると言える。しかしエヴリンが上記のようにジェイムズと会っている時、ジェイムズの侍女として仕えているエヴァを発見するのであるが、このことによってわれわれは再びロマンスの世界に引き入れられる。

かくしてエヴリンの悶々とした時を過すうちに情勢はボイン河における二王の対決へと進展する。この戦いにおけるウィリアムは前述した如く好戦的に向う見ずな戦士として描かれているのである。この戦闘においてエヴリンは、その前日にはウィリアム王の側近くに居たが、翌日の戦闘の際には、まったくの中立の立ち場を守り、実際の戦闘には参加しなかったことはわれわれの注意を惹くのに充分である。それは「二つの宗派の間に長い期間にわたって培われてきた憎悪を知悉しており、今、祖国（エヴリンはエドモンドからは Sassenach——イギリス野郎——と罵られてはいたが、自分ではアイルランド人であるという意識を持っていた——筆者注）を荒廃に帰してしまった内乱は、⁽³²⁾（その責任の）一部は彼ら二派の人々のせいである」と思って、エヴリンは宗教的な理由による争いを極度に嫌悪していたからである。エヴリンのこのような感情による態度は、アイルランドのこの内乱を主として宗教的対立とみる作者の態度を示すものである。つまりエヴリン対エドモンドの確執も、エヴァのエヴリンに対する忌避の念も、さらにはアイルランド人対イギリス人という民族的な対立も、その根底にはこのような宗教的葛藤が存在することを作者は強調しているのである。

リムリックの戦闘もすでに述べた通りであるが、リムリック条約はカトリック教徒にとってかなり有利な条件で締結された。しかし歴史が示す通り、それは英国会議の批准するところとはならず、サースフィールドと共にフランスに

移住した約1万4千名のアイルランド人（その中にエドモンドも含まれているのだが）は臍を噛む結果となった。しかしエヴリンとエドモンド及びエヴァとの関係は回復されて、エヴァはエヴリンと結婚してアイルランドに残り、彼らの愛は成就されるに至った。

以上を要約すれば、この膨大な小説はカトリック対プロテスタント、アイルランド人対イギリス人、ジェイムズ対ウィリアムという重層的な対立関係、即ちアイルランドにおける対極性を、エドモンド対エヴリンの対立に集約し、象徴化した作品であって、作者ジョン・バニムはそのような対極性の根底にはアイルランドにおける根深い宗教問題が存在していることを示そうとしたものである、とすることが出来よう。

(7)

この作品に一貫する作者の願望は、以上述べたような、アイルランドにおける対極性の解消、つまり宗教的和解と民族的融合にあったことは否めない事実である。それはこの作品の主人公エヴリンの終始変らぬ言動に明らかに示されていると言えるだろう。まず冒頭でのベルファストからキャリックファーガスへの旅の途上でそれは示される。カトリックへの憎悪から彼らの罵言を平気で言うオリヴァー・ウィトルに対して彼は「ねエ、オリヴァー。そういう批判は止した方が賢明であるし、上品でもありますよ。時代は変わっているのですから。お互いに兄弟として手を差しのべる機会がすべての宗派の人たちに与えられて以来、時代は好転してきているのです⁽³³⁾」と言ってたしなめる。その上、オリヴァー同様に徹底的にカトリックを憎悪しているポール叔父夫婦とは出来るだけ居を共にしないように注意を払い、敬遠しているのである。唯一人ジェレマイア (Jeremia) 叔父だけは例外で、エヴリンは彼に対して親密な感情を持っている。それは、彼の親カトリック的心情のせいである。ジェレマイアは船乗りをしていたために視野が広く、その交際範囲も広がったために親カトリック的視野を持つに至ったのであった。惜しむらくは彼の生活は乱れ、酒に酔い痴れた人生を送り、一族からは疎んじられている存在だった。

またエヴリンは狂信的なジョージ・ウォーカー（ボイン河の戦闘でオハガティと激烈な格闘の末、両者とも死に到った）の説得にもかかわらず、ウィリアム軍に参加することを肯んじなかったのである。そして彼が結局ウィリアム軍の将校として参加するに至ったのは、自分の館が盗賊の暴挙によって荒廢に歸した時であって、したがってそれは宗教的な理由によるのではなく、私怨によるものである。しかも盗賊＝アイルランド人＝ジェームズ軍という単純な誤解に基ずくものであった。この誤解から彼を救ったのはエヴァに対する愛情と、エドマンズの彼に対する厚い友情であった。したがって彼はデリーの包圍戦の場合にも、ボイン河の戦闘においても、そしてリムリックの攻防戦にも、直接参戦することはなく、常に客観的な傍観者の立ち場をとっていた。たとえそれがデリーの包圍戦の時には、捕虜としてのエドマンズの監視役を命じられた上に、妹エスタの看病に追われたという偶然の理由からにしろ、そしてまたボイン河の戦闘においては戦傷のために参戦できなかったにしろ、そしてリムリックの攻防戦においては、ジェームズ軍の捕虜としてサースフィールドの監視のもとに、彼と行を共にしたためとはいえ、このような状態に彼を陥れて参戦させなかった作者の意図は余りにも明瞭である。

さらにジェームズⅡ世がアイルランドを去るに当たっての「法律によって良心の自由を確立するよう努力せられたい」、そして「われらがカトリックに対して（プロテスタントと）同様の権利を認めた時でさえ、われらに対してなされた偽りの非難とは逆に、われらの王国に確立されている信仰（プロテスタント）を現在のままの上位の位置に維持したいというわれらの望みのあかしの耳を傾けてもらいたい⁽³⁴⁾」、という言葉に明らかなように、相手の宗派を倒すことではなく、お互いに信仰の自由を認め合って平和に共存することが作者の願いであったのだ。そしてその実現の成否はリムリック条約の順守にかかっていたのである。エドマンズはアイルランドを去るに際し、エヴリンに次のように心情を吐露するのである。

さらばだ、エヴリン。君に、そして君のような人たちにわれわれはこのリ

ムリック条約の順守を期待する。もしそれが順守されるならば、それはアイルランドがたとえ自由の国でなくとも、平和な国であり、幸福な国になり得るということを知る慰めを、祖国からの追放者たちに与えることになるだろう。⁽³⁵⁾

これこそがまさに作者ジョン・バニムの切なる願いであったのだ。しかし歴史は皮肉にもエドマンドの、そして全アイルランド人の、そして後世の作者の、このような切なる願いとは逆の方向に動いていったことをわれわれに教えている。そしてさらに作者はエドマンドに次のように語らせている。

アイルランドはひとつの国として統一されなければならない。そしてイングランドをして真に偉大ならしめているすべての点においてイングランドと公正かつ高貴な競争をしなければならない。さもないと何代にもわたってアイルランドは貧しい、打ちひしがれた、狭量な、侮蔑すべき、現状のような党派のあい争う、世界中から、そしてイングランドからさえも軽蔑される、⁽³⁶⁾イングランドの一地方のまま留まらねばならないだろう。

しかし作者がこの作品執筆当時（1825年）、アイルランドは依然としてプロテスタント優位の国であり、オコンネル（O'Connell）の強力な指導のもとにカトリック協会（Catholic Association）が設立され、カトリック解放運動がまさにその頂点に達しようとしていた時代であった（この運動は1829年のカトリック解放令——Catholic Emancipation Act——によって一応の勝利を得たのだった）。アイルランドにおいては歴史は過去のものではなく、歴史はそのまま現在に生きていたのであり、現在を強く規定していたのだった。作者の歴史観はこのような事実に基づくものであったのだ。

したがって現実には果し得なかった作者の理想は、エヴリンとエヴァとの結婚という形で表現される以外になかったのである。それは作者にとってはプロテスタントとカトリックの融合の象徴であったのだ。それはまた他の一面では、

余りにも作者の理想の傀儡化された——アイルランド人からは Sasenach と蔑まれ、イギリス人からは裏切者と糾弾された——エヴリンの、自己のアイデンティティの探求に他ならなかった、と言えるだろう。

(8)

この作品の登場人物の描写はすでに見たようにロマンス的な雰囲気をもって登場するが、物語が進むにつれ、リアリスティックな描写へと移って行くことがわかる。しかし先に述べたアイルランドの持つ対極性は登場人物の描写にも影響を及ぼし、イギリス人のリアリスティックな描写に対してアイルランド人の描写がエドモンドとエヴァは例外として、最後までロマンス的であり、最終章においてオナフを始めとしてモイヤ・ラハティ (Moya Laherty) など、謎を秘めた人物の解明が余りにも単純になされている点がこの作品の欠点となっていることは否めない。その上エドモンドの強烈な個性とエヴァの激しい情熱が活写されているのに対し、エヴリンが作者の理想の余りにも典型化された人物となってしまったために、彼の性格描写が弱まったことが、この作品の歴史小説としての弱点であり、ジョン・バニムがスコットを超えることのできなかつた最大の理由である。その上、常に死の影を伴って登場するゴシック的な雰囲気を持ったオナフ、モイヤ・ラハティ、それにジェイムズ・マクドネル等の人物の描写が余りにもロマンス的であり過ぎる憾は否定できない。しかしこれらの欠点にもかかわらずこの作品をしてアイルランドにおける本格的な歴史小説への大きな一歩たらしめたものは、作者ジョン・バニムの確たる歴史観であり、歴史と虚構とを融合させて歴史的な社会を再構成する優れた想像力の結果である、と言える。

以上のような意味で、この作品はロマンスから脱却しようとしたが完全には脱却し切れなかった、換言すればロマンスから小説への過渡的な作品である、と言うことができる。

注

- (1) *The Life of John Banim*; P. J. Murray. Garland Publishing, New York & London, 1978. による。p. 165
- (2) 「王政復古とジャコバイト戦争 (1660～91) ; J. G. シムズ。古田哲一氏訳。『アイルランドの風土と歴史』堀越智氏監訳、論創社、1982. による。
- (3) *The Boyne Water, vol. III*; John Banim, Garland Publishing Inc., New York & London, 1978, p. 208～209
- (4) *The Irish Novelists, 1800—1850*; Thomas Flanagan, Greenwood Press, Westport, Connecticut, 1976, p. 189
- (5) *The Boyne Water vol. I* ; p. 130
- (6) *ibid. vol. I* ; p. 210
- (7) *ibid. vol. I* ; p. 45
- (8), (10) *ibid. vol. II* ; p. 314
- (9) *ibid. vol. II* ; p. 315
- (11) *ibid. vol. III* ; p. 376
- (12) *ibid. vol. III* ; p. 381
- (13) *ibid. vol. III* ; p. 420
- (14) Essay on Romance, by W. Scott, from *Great Hatred, Little Room: The Irish Historical Novel*; James M. Cahalan. Gill and Macmillan, 1983. p. 13
- (15) *The Boyne Water, vol. I* ; p. 1
- (16) *ibid vol. 1* ; p. 1
- (17) *ibid vol. I* ; p. 3
- (18) *ibid vol. I* ; p. 5
- (19) *ibid vol. I* ; p. 9～10
- (20) *ibid vol. II* ; p. 238
- (21) *ibid vol. III* ; chap. XII (p. 361～383)
- (22) *ibid vol. I* ; p. 74
- (23) *ibid vol. I* ; chap. VII (p. 179～202)
- (24) *ibid vol. II* ; p. 214～215
- (25) 彼らの旅は終始一貫、北アイルランドの険路にわずらわされるのであるが、これは彼らの苦難に充ちた不幸な人生を象徴しているように思われる。そしてアイルランド西部の険路がサースフィールドの進行に大きな困難と危険を与えたこと (*vol. III, chap. IV*) と相俟ってアイルランドの厳しい運命の象徴ともなっている。
- (26) *The Boyne Water, vol. I* ; p. 61
- (27) *ibid vol. II* ; p. 28
- (28) *ibid vol. II* ; p. 420
- (29) *ibid vol. III* ; p. 111
- (30) *ibid vol. III* ; p. 120,
- (31) *ibid vol. III* ; p. 172
- (32) *ibid vol. III* ; p. 246～247
- (33) *ibid vol. I* ; p. 11
- (34) *ibid vol. III* ; p. 269
- (35) *ibid vol. III* ; p. 430
- (36) *ibid vol. III* ; p. 435